

理工系大学院における留学生組織作り

－金沢大学大学院自然科学研究科留学生委員会－

岸田 由美^{注1}

要 旨

金沢大学大学院自然科学研究科は、2015年9月、在籍留学生と協力しながら、留学生にとってより魅力的かつ過ごしやすい環境を構築することを目的として、在籍留学生の代表者組織である留学生委員会（International Student Committee：ISC）を組織した。発足メンバーは、在籍留学生の出身国をほぼ網羅する14ヶ国18人である。ISCの活動の柱は以下の4つである。

1. 研究科在籍留学生の関心の代弁者となり、関係教職員とともに留学生が学びやすい環境づくりに貢献する。
2. 学生アンバサダーとして、研究科への新規留学希望者や入学予定者に対して、英語や母国語を用いて Facebook での情報提供を行い、留学を支援する。
3. ピア・サポート活動
4. 留学生間並びに日本人学生や地域住民との交流を促進する活動

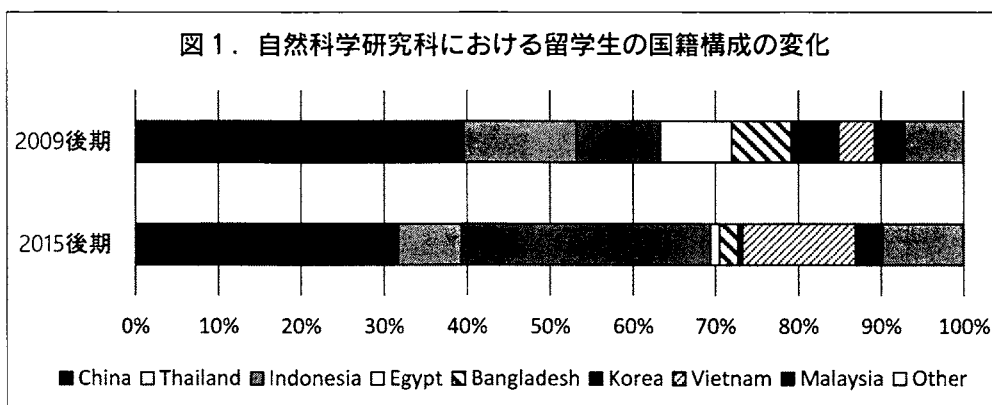
本稿では、ISCの実施責任者の立場から、ISC設立の経緯と、発足から4ヶ月間の活動状況を報告する。

I. はじめに

金沢大学大学院自然科学研究科は、2015年9月、在籍留学生の代表者組織として、留学生委員会（International Student Committee：ISC）を設立した。ISCは2015年度募集の金沢大学教育改革GPに採択され、2017年度までその助成を受け活動する。この活動の成果が認められ、全学的な組織の発足へと結びつくことも期待されている。本事業の申請者及び実施責任者は、理工学域留学生教育研究室で理工系留学生の相談指導や各種課外教育プログラムの運営にあたる筆者である。本稿では、ISC設立の経緯と、発足から4ヶ月間の活動状況を報告する。

II. ISC 設立の背景

自然科学研究科では、平成20（2008）年度より留学生ラウンドテーブルトーク^{注2}を開催し、留学生の要望を吸い上げながら、教育環境の国際化に取り組んできた。この間金沢大学は、留学生30万人計画を受け大学としても留学生の増員を方針として策定し、2009年度まで350人前後だった留学生数は2010年度以降500人弱へ増加、2015年度は500人を突破した。自然科学研究科においても、非正規生を含め120～130人台だった留学生数は2010年度後期以来180人前後を推移している。特に大きな変化があったのは、入学形態と出身国の構成である。入学形態に関しては、研究生を経ず海外から正規生として入学する学生が増えたこと、国籍構成に関しては、インドネシア人が中国人に匹敵する規模となったほか、かつて4%程度であったベトナム人留学生が約14%を占める第3グループとなったことが特徴的である（図1）。最近の特徴としてはミャンマー人学生の増加もあげられる（2015年後期の「その他」の半数近くがミャンマー人留学生で第5グループ）。



かつて半数近くを占めた漢字圏の学生は3割程度となった。二重学位プログラムや国際プログラムを含め、英語で学ぶ学生が多数を占めるようになり、学生課の窓口、あるいは筆者が担当する理工学域留学生教育研究室の業務における学生とのやり取りで、英語を用いることが日常となっている。しかし、学内環境の現状としては日本語が主要流通言語であるため、日本語がわからない留学生にとっては特に、学内のリソースへのアクセスが平等に開かれているとは言いきれない状況がある。同時に、留学生数が増加する中で、個々の学生の声を身近に聞くことの難しさも増している。

また、海外からの直接入学者が増える中で、大学に関する情報を、いかに効果的に、効率的に提供するか、という問題も大きくなってきている。かつて大学院に入学する

留学生は、金沢大学の学部出身者、他大学の学部出身者、母国の大学を出た後来日し日本語学校で日本語を学んだ者、等であり、多くは日本語ができ、日本の社会事情等について改めて解説する必要性はさほど大きくなかった。しかし現在は、新入留学生の多くは入学のために初めて来日するのであり、大学のことはもちろん、日本語も日本の社会状況もよくわからない状況であることが一般的になってきている。留学を計画・準備するための情報提供、また入学初期の生活面を含むサポートがますます重要になっているが、英語や各国の言語での対応をきめ細かにするためのマンパワーは決して十分とは言えない。入学予定者から、同国出身の先輩留学生を紹介して欲しいという依頼が寄せられることも珍しくない。

留学生のサポートネットワークとしては同国人組織・グループの存在も大きい。留学生会等については、その活動を通して、「留学生間はもとより、留学生と一般学生、また大学内の構成員、更には地域等の関係者との間での、サポートやネットワークが広がることは、留学生の孤立を防ぎ、留学生のQOL (Quality of Life) の向上につながる」と評価されている¹³⁾。金沢大学においても、国別の留学生組織・グループ並びにムスリム学生の組織が学内外で活動しているものの、大学が公式に把握・認定しているわけではなく、そうした組織・グループとつながる公式なチャンネルがない状態であった。また、同国・地域出身者が数人あるいはたった1人しかおらず、ムスリムでもない学生は、そうしたネットワークの恩恵にあずかることは難しい。

多様な留学生の代表者による学内組織づくりは、以上のような背景のもとに数年来筆者の願望としてあり、2015年4月の教育改革GP応募を契機に実現に向け動き出した。

Ⅲ. ISC の設立趣旨, 活動内容

教育改革 GP の申請書に記入された設立趣旨は以下の通りである。

「留学生コミッティーの創設は、在籍留学生の組織化により研究科と留学生間のより緊密な意見交換、情報交換を促進し、留学生受入れ体制の充実をはかるものである。さらに、留学生の出身国の多様化による言語・文化的多様性に対応した、同国出身者によるきめ細やかかつ多言語による新規留学希望者に対する情報提供体制の整備、在籍留学生に対するピア・サポート体制の整備を同時にかなえ、世界各国からの一層の留学生受入れに対するマンパワーの不足を解決する。あわせて、コミッティーの活動が在籍留学生間の交流を促進し、孤立化を防ぐことにより、問題を未然に防ぐ、あるいは早期に発見するサポートネットワークとして働くこと

も期待される。」(平成27年度金沢大学教育改革 GP 申請書「自然科学研究科留学生コミティの組織化」より)

この趣旨に対応して、ISC の活動の柱としては以下の4項目を設定した。

1. 研究科在籍留学生の関心の代弁者となり、関係教職員とともに留学生が学びやすい環境づくりに貢献する。
2. 学生アンバサダー活動：コミティメンバーには、自然科学研究科長より、学生アンバサダーの認定証が授与される。学生アンバサダーは、研究科への新規留学希望者や入学予定者に対して、英語や母国語を用いてオンラインでの情報提供を行い、留学を支援する。
3. ピア・サポート活動：理工学域留学生教育研究室と連携しながら、文化・言語的背景を同じくする留学生に対して、同じ留学生の立場から問題解決に向けた助言、手助けを行う。
4. 留学生間並びに日本人学生や地域住民との交流を促進する活動

学生アンバサダーとしての情報発信や質疑応答、一部交流活動の準備や運営に対しては、GP 予算から謝金が支払われる。

IV. ISC の設立まで

教育改革 GP の採択通知を受け、まず取り組んだことは、学内のワーキンググループづくりである。3年後の全学化もにらみ、人間社会学系留学生の相談指導を担当する宮崎悦子教員、国際機構留学生センターから伊藤大将教員とママードウア・アイダ教員、中国人留学生として自然科学研究科博士課程を修了し、現在先端科学・イノベーション推進機構の博士研究員で、国際機構支援室留学生アドバイザーも務める薛芸氏の参加を得ることができた。7月6日に初会合を行い、組織作りや活動方針等について意見交換を行った。利用者の多さの面から、オンラインでの情報発信には Facebook を用いることになった。その後宮崎教員には、留学生の組織化や、留学生による学内活動を活性化するためのノウハウを学ぶための他大学の視察も行ってもらい(7月28日~29日、香川大学及び岡山大学)¹²⁴、その結果を基にワーキンググループで ISC の組織や運営のあり方について再度意見交換を行った(8月4日)。

7月下旬には ISC のメンバー募集も開始した。研究科に在籍するなるべくすべての国籍からメンバーを得ることを重視した。2015年度後期からの活動開始を想定し、9

月末修了予定者を除き、金沢大学留学生ネット（KUISNet）^{#5}から、メールアドレスが登録されている全在籍留学生に、岸田から代表者募集のメールを送付した。同国人が多数在籍する場合は、その国籍の該当者向けに自薦他薦で代表者を募集するメールを、同国人がいない場合はその個人に参加を依頼した。その結果、8月下旬までにはほぼ全ての国籍を網羅する、14ヶ国18人から参加希望あるいは参加への同意を得ることができた。発足時のメンバー構成は表1の通りである。下線は、募集の時点で（その多くは現在も）同国からの留学生が1人のみだった国である。カッコ内はメンバーの人数を示す。男女比は13：5で、偶然ではあるが、メンバーが2人の国の場合うち1人が女性である場合がほとんどとなった。修士課程と博士課程の割合は、これも偶然であるがちょうど半々であった。

表1. ISC 発足時のメンバー構成

東アジア	中国(2), <u>韓国</u> (1)
東南アジア	インドネシア(2), マレーシア(1), ミャンマー(2), タイ(2), ベトナム(1)
南アジア	<u>インド</u> (1), <u>パキスタン</u> (1)
西アジア	<u>イラン</u> (1)
ヨーロッパ	<u>リトアニア</u> (1)
アフリカ	<u>エジプト</u> (1), <u>タンザニア</u> (1)
オセアニア	<u>フィジー</u> (1)

V. ISCの活動状況：活動開始から4ヶ月間の記録

9月末より1月末まで、約4ヶ月の活動をまとめる。ただし、活動の4本の柱の内、ピア・サポート活動はまだ具体的には始動していない。

1. 意見交換他

9月4日にメンバーにとって初めての会合を開催し、ISCの活動目的、内容、方法、今後の予定などを話し合った。その後、メンバー間の全体会合としては、9月29日（アンバサダー認定式終了後）、11月9日、1月12日に行っている。フェイスブック等の活動の状況や交流イベントの計画について話し合うほか、それぞれこうした情報が欲しい、こういった点で困っている等の意見を出し合い、筆者からリソースを紹介する他、改善策について意見交換をしたりしてきている。

11月25日には、第7回自然科学研究科留学生ラウンドテーブルトークを、ISCの企画・司会進行で行った。ラウンドテーブルトークは、研究科長はもちろん、国際担当

副学長や留学生センター長が出席するため、大学の方針を留学生に知らせたり、留学生のニーズを直接大学経営陣に届ける場としても機能している。今回のテーマは、「留学生サポートの課題とサポートの担い手の多様化を考える」であった。特に日本語力が十分でない留学生が抱えやすい問題の共有とサポートのあり方を考えるだけでなく、そこで留学生自身に何ができるかを考える、意欲的な企画であった。留学生ラウンドテーブルといっても、これまで教職員が企画、司会進行を行い、留学生を招くという形式だったが、今回初めて留学生自身がテーマを考え、他の学生、そして教職員に意見を求める形で進められた。ISCが、研究科内はもちろん、全学的にも顔の見える存在となる大きな契機となったものと思われる。

その後、12月9日に、ノーベル物理学賞を受賞した小林誠博士の講演会が自然科学研究科で行われた際には、研究科長からの依頼を受け、留学生への広報への協力、留学生から英語で質問があった場合の通訳補助などにISCが協力した。

2. 学生アンバサダー活動

メンバー間の情報交換用に、9月4日、筆者が開設準備を進めてきたFacebookグループの運用を開始した。ISCのFacebookページⁱ⁶の開設準備も進め、9月18日にISCの趣旨を説明するノートを掲載したのを最初に一般公開を始めた。9月29日には学生アンバサダーの認定証交付式が行われ、研究科長からメンバーに認定証が授与されたⁱ⁷。この授与式の報告が、ISCメンバーによるFacebookへの初めての投稿となる。その後は、自己紹介やそれぞれの研究室、大学の様子や周辺環境を紹介する記事をメンバーが順次投稿し、毎日1本以上の投稿を保つことを目標とした。しかし、開設当初の1ヶ月間はほぼ毎日投稿があったものの徐々に少なくなり、1月31日まで約4ヶ月間の投稿本数は全体で73本にとどまった。発信言語は主に英語、そのほかに各国の言語が用いられている。

Facebookの投稿は、投稿したメンバー個人の「友達」へ、さらに「友達」の「友達」へと広がる形で拡散される。そのため、それぞれの投稿によりその情報が届いた人の数は数十から数百、2千人以上まで様々だが、これまでに270を超える「いいね!」を獲得した。誰が「いいね!」してくれているのかについては、男女はほぼ半数、主な年齢層は18-34歳となっている。約半数が日本国内在住だが、次にインドネシア、ベトナム、ミャンマー、マレーシア在住者が続く。

Facebookではメンバー構成も紹介し、気軽にメッセージで質問をして欲しいとアナウンスしているが、実際に寄せられた質問は1月末までに3件である。うち1件は、新年度他研究科に交換留学として入学予定の者からの住居に関する問い合わせで、英

語とマレー語で2人のISCメンバーが対応した。他2件はそれぞれ、研究者として近隣に滞在予定、滞在中の外国人からの問い合わせで、金沢周辺での住居の情報、ハラルフードを販売する店舗の情報を求める内容であった。応答には、英語、マレー語が用いられた。

3. 交流活動

校内の交流活動としては、10月18日にベトナム人の留学生組織の代表でもあるメンバーが中心となって、国際サッカー大会が開催された。ベトナムチームの他、インドネシアチーム、マレーシアチーム、日本チームの対抗で、約50人がスポーツで交流した。スポーツでの交流へのニーズは比較的高く、ISCの会合やラウンドテーブルトークでも話題になった。今後もより少人数、あるいは個人でも参加できる形でのスポーツ交流イベントを開催する計画がある。

対外的な活動としては、9月28日にイベントへの留学生参加者の募集などで以前から交流のある地域の商店街からの要望を受け、外国人利用者への利便性向上などを目的とした意見交換を行った。また、11月6日並びに12月5日には市内の高校生(泉丘高校)との英語での交流プログラムを行った。いずれも泉丘高校のSGHとしての授業の一環として行われ、いずれの場合も、高校側から参加した留学生に謝金が支払われている。1回目は、泉丘高校2年生の22人が大学を訪れ、インドネシア、ミャンマー、マレーシア、タイ、イラン出身の6人のISCメンバーと、環境や食料、エネルギー問題等のグローバルな課題について英語で意見交換を行った^{注8}。メンバーにとっては、日本の高校生達がどのようなことに関心を持ち、どんな意見を持っているかを知るよい機会になったようである。2回目はISCメンバーにその友人を加えた、インドネシア、ミャンマー、マレーシア、ベトナム、イランからの留学生計12人が泉丘高校を訪問し、1年生との英語ディスカッションで自国の文化等を紹介した^{注9}。

VI. おわりに：活動の評価と今後の課題

ISCの運営はまだ起動に乗ったとは言えないが、研究科内での存在感は徐々に高まってきており、留学生参加のイベント等では研究科在籍留学生の顔としての役割を求められるようになってきた。ラウンドテーブルトークでの意見発信を始め、留学生が学びやすい環境づくりへの「声」を持つ存在として、今後の組織的成長が期待される。

メンバー間の関係も次第に親しいものになり、自主的なイベントの企画等も行われ

ようになってきている。同国人グループを超える交流の創出という意味では、確かな前進を感じる。金沢大学では日本人学生を主体とした留学生との交流を主目的とした学生団体 KISSA も活動している。今後、そうした他団体との関係も含め、より幅広い交流活動の展開に結びつけていきたい。

Facebook に関しては、メンバーによる投稿をいかに活発に保つかが大きな課題としてあるほか、今後は内容や体裁についても検討を進めていきたい。また、大きな課題として、Facebook は自然科学研究科在籍留学生の主要な出身国の一つである中国国内では利用できないという問題がある。そこで、ISC では中国国内向けの SNS を利用した情報発信についても準備を進めている。Facebook に関しては筆者がアカウントからページの開設までを行うことができたが、中国国内向け SNS に関しては中国国外にいる日本人である筆者ができることはごく限られる。そこで、1 月末に中国人メンバーを新たに 2 人 ISC に迎え、4 人体制とした上で、ワーキンググループメンバーの薛芸氏にマネージメントをお願いした。年度内における中国向け SNS のアカウント開設と運用開始を目指し、活動してもらっているところである。

ページのメッセージ機能を使ったオンラインでの質問対応については、残念ながらまだ数も少なく、これまでのところ自然科学研究科に直接関わる問い合わせはないが、金沢大学全体や地域への貢献が若干とはいえできたことは嬉しい成果である。特に他研究科への入学予定者からの質問については、マレーシア人からの問い合わせであったことから、マレーシア留学生会の会長でもあるメンバーも対応した。入学前から学内の同国人コミュニティにつながる機会を提供できたことは幸いだった。こうした情報提供へのニーズの存在、オンラインだからこそ生まれるつながりを確認することができたと考える。今後 ISC の Facebook ページがそうしたニーズをさらに掘り起こし、留学準備における不安解消や入学前からの学内ネットワークづくりに一層貢献していくことが期待される。

ピア・サポートについては、ISC としての具体的な活動をまだ報告することはできなかったが、現在同国人組織内あるいは友人同士として行われているピア・サポートについて、そうした同国人組織や友人関係でのリソースが十分ではない留学生の存在を念頭に置きつつ、ISC としてどのような形で貢献できるか、その検討と試行を充足 2 年目の課題としたい。

全体として、ISC の運営はまだ顧問役である筆者の采配に依存するところが多いが、3 年間の事業期間内に徐々に留学生自身の主体的な活動としての面を成長させていきたいと考えている。それをどのように進めるか、組織のあり方など、他大学の事例等から多く学びたいと考えている。

【注】

- 1 岸田由美（金沢大学理工研究域）
- 2 ラウンドテーブルトークに関しては、苗田敏美，岸田由美，松下美知子「自然科学研究科主催『留学生ラウンド・テーブル・トーク』からの示唆－留学生支援の立場より5年間の議論と今後の課題の検討－」（『金沢大学留学生センター紀要』第16号，2013年3月，91-102ページ）を参照。
- 3 有川友子「連携協力と信頼関係の重要性－大阪大学国際教育交流センターにおける留学生会等と協力した取り組み事例を通して考える－」（『留学生交流・指導研究』13号，国立大学留学生指導研究協議会，2010，9-16ページ）。
- 4 留学生会や関連組織の活動状況や組織運営について，また留学生を活用した言語学習サポート活動などについて，香川大学留学生センターのロン・リム教授，岡山大学グローバル・パートナーズの岡益巳特任教授並びに宇塚万里子教授，岡山大学言語教育センターの藤本真澄講師に情報提供をいただいた。この場を借りて心より感謝申し上げます。
- 5 <https://kuisnet.kanazawa-u.ac.jp/>
- 6 <https://www.facebook.com/isc.gsnst.KU/>
- 7 その様子は大学のウェブサイトにも紹介された。金沢大学ニュース，2015年9月30日登録，「自然科学研究科留学生委員会（ISC）学生アンバサダー認定式を挙行」 [<http://www.kanazawa-u.ac.jp/news/30416>]（2016／2／1）
- 8 金沢大学ニュース，2015年11月9日登録，「学生アンバサダーが泉丘高校2年生と交流」 [<http://www.kanazawa-u.ac.jp/news/31591>]（2016／2／1）
- 9 金沢大学ニュース，2015年12月8日登録，「留学生が泉丘高校1年生とディスカッション」 [<http://www.kanazawa-u.ac.jp/news/32522>]（2016／2／1）

Establishment of International Student Committee at the Graduate School of Natural Science and Technology, Kanazawa University

Yumi Kishida

Abstract

Graduate School of Natural Science and Technology (GSNST) established the International Student Committee (ISC) to improve its campus environment and services in cooperation with its international students in September 2015. The ISC consists of representatives from almost all countries that constitute the school ; it started with 18 members from 14 countries. The ISC members take part in following activities under the supervision of the International Student Advisor's Office of College of Science and Engineering.

- 1 . Representing the concerns of intl. students of GSNST ;
- 2 . Working as Student Ambassadors of GSNST with providing information online on Facebook ;
- 3 . Providing peer support to the other intl. students ;
- 4 . Promoting friendship among intl. students, and between intl. students and Japanese students and the local community.

In this paper, I report the background and the process of its establishment and its performance for the first four months.